

ので私共も一応安心してまた歩き出した。

夜は民家の軒下で寝たり草むらで野宿し、夜間になれば銃声が響き渡ってくるといった状態の毎日である。目的地天津まではまだまだ歩かなければならないのだ。

天津に到着したのは十月の末頃でお互い同志の健康と現在までの無事であったことを祝し、今後とも幸せであらんことを祈って別れた。

戦争という痛烈極まる悲劇に私は胸が一杯であった。

昭和二十一年五月上旬米軍の上陸用舟艇で一般在留邦人と一緒に天津塘沽より舞鶴港に上陸し故郷の小樽に帰って来ました。

その頃は食糧がないので買出部隊にまじり家のため近所の人のために働きました。

戦前国鉄小樽駅に駅員として勤務しておりましたので両感音性難聴でなければ就職できたのですがこれも出来ぬし食糧難の関係もあり、自分で緊急開拓者として両親兄弟をつれて現住地の赤井川村へ入植したのです。昭和二十三年四月でした。

昭和二十四年三月同じ開拓者の仲間の家から嫁を迎え

草小屋（三角小屋）から開墾が本格化し、石礫、木の根、笹の根をスコップで掘り畑を作り食糧難をのがれた。だが販売する農作物が少ないので暇を見ては札幌などへ出稼ぎをし子供達の養育費としたり、肥料代等の一部とした。

なお、食糧基礎となる稲作には造田をしなければならず、朝早くから夕方おそくまで頑張り、食糧として供出するまでになりましたが、年々歳々体も弱り開拓者生活、満四十年の歴史に終止符を打ち、現在は市街地へ移り保養に努めております。

満州敗戦体験記

北海道 中山 彰

海外居住の動機

赤い夕陽の満州に！ 私は満州鉄道警護隊員として銃をとり、妻は南満盤山県地区開拓団員として鋤を持って渡満しました。

私は奉山線錦州隊に着任、先輩指導の下に実務に付き
ました。任務は鉄道用地内の警察業務の執行と、防諜謀
略行為に対する特殊任務が目的でした。

当時北支戦線は日増しに拡大され、軍事輸送路線とし
て重要な地点にありました。毎日錦州駅において、乗降
客に対し身体及び携行品の検問検査を行い、不逞者の武
器、密輸品、阿片、統制品、暗号類の検挙に励みました。
業務も次第に熟達し列車警乗勤務となり、次いで沿線
各駅の警護分所勤務となり、満系隊員とともに日夜警護
任務に万全を期しました。

また鉄道愛護精神普及のため、沿線住民青少年を対象
に宣伝宣撫工作も行いました。

治安の悪い吉林省、敦化、熱河省、朝陽地区、の鉄道
警備の応援助勤にも出勤、任務を果たしました。

しかし大東亜戦の戦況が次第に悪化すると満州住民の
動向が変化し予断を許さない緊迫した情勢が現われはじ
めました。

終戦直前後の激動状況

一、終戦間近関東軍の、在郷軍人の大量動員召集は、極

度な生産基盤の動揺、残留老人、婦女子に、対する
精神的な犠牲性と、被害をもたらした。

二、対ソ戦略防衛のための新京撤退通化作戰計画は、有
名無実ひたすら人民に対し動揺を与えたのみ。

三、王道楽土建設も五族協和も、実効なく画。

四、行政交通警務、金融、等の主要機関の閉鎖は、僻地
住民指導を欠き避難行動に支障混乱の原因である。

五、満系駐屯軍の反乱発生、引揚住民へ被害大。

六、抗日分子の煽動により、一般住民が暴徒化し、商店、
住宅、物資倉庫、寺院、神社に対し、喚声を叫び襲
撃による恐怖と、被害の二重の苦発生。

七、国民軍、中共軍の、国内進攻内戦により退却時に発
生した日本人に対する強制徴用使役に恐怖増大。

八、元満州国幹部、警察官、軍人、教師等は、国家漢奸
と称し、連日逮捕投獄ソ連国への連行拉致、密告、
告発等、最大の恐怖時代に入る。

九、その他統制なき使役強要、住居侵入、数限りなし。

なお病人死者は、付近の公園、山野に埋葬。

敗戦により天も慟哭して、連日記録的降雨、輸送途中

の軍馬は主を失って、野外に食を求めたおれる等、実に悲惨な情景でした。

引揚げとその後の労苦

酷寒と貧困、耐乏の越年生活も終りを告げ、陽春の訪れが異郷の地に、待望の引揚情報をもたらした。

昭和二十一年五月十五日、万感胸に迫る感激裡に、錦西県コロ島埠頭を出航した引揚船は、一路九州佐世保軍港に入港、無事上陸致しました。

出発駅は、帰国者にふさわしい駅名、南風ヶ崎駅でした。故郷鹿沼駅（栃木県）を目ざして、車中の人となり車窓を流れる風景はまさに、国破れて山河あります。また悲惨な空爆の被害を受けた都市を過ぎて、鹿沼の地を踏んだのは、故郷を出て七年の歳月が流れておりました。

安住の地である実家には、両親と北支戦線復員の第二人と、東京疎開の妹二人の在所帯、毎日が食糧難で農家への闇の買い出し。

引揚地支給の三千円と、二歳の長男、衣類のリユック一個の着のみ着のまま金もなく、職もなし、まったく前

途真暗、遂に妻と相談の結果、七転八起、再生のため妻の出身地、北海道増毛町を屈指して、再度長途の旅に出発しました。

時友人の家を借り、町役場に相談に行き、幸い引揚者住宅を与えられ、冬は、暑寒岳の冬山造材現場人夫、春は、鯉漁場人夫、夏は、町有林植林人夫、秋には出稼炭鉱夫と転々。

漸く、知人の援助により、郵便配達員となり停年まで務め退職。更に警備員として、北洋銀行、増毛高校と、七十八歳春まで務め、現在四人の子供も独立し、興亡果てなし人生航路の余生を、大切に平和であるよう願って、平和祈念事業の責任の一端を記す。

惨たんたる八年間の強制労働

山形県 斎藤善作

満州事変の勃発した昭和八年は戦時下の不況の、どん底にあった。